

110
2262
7-8

記
書
部
蔵

吉田兼好

吉田兼好 愚明 吉田八木の名あり 都東山

中の後に神在神社者言曰社與春日社
為同縣貞觀間中納言藤原山陰房處之
季彼地に居位もあにその名はくもて言
乃急好くいり或曰兼好八弘安五年生而觀
應元年四月八日六十八にして卒 野山院
院中位牌今にあり又曰後深草院中元
年に崩御ありは時兼好發心とあれは平
二の年に相わらあり

後醍醐天皇 愚明 仁王九五代 ぬの帝之
高武彦守原直に海へく 鈔 太平記 二十卷
に於て兼好をとり 愚明 太平記 評判云原直
の行跡はひく 愚明 のものとてをれは是
やんはけいどとたりて出さるりたり

徹書記 物音 愚明 三卷有假下卷に見る
に月くゆらぬのみ人の物くそ好くまたか
やうあふゆらぬおとのあまに云へてまた
るりけい生得してあふ久おほくはたさるる
にしてありてまふゆらぬとありきは内裏の

野 流はくく 草は吉田兼好

流が化あり兼好は後醍醐
乃天皇の時乃人あり高の
武彦守原直より海へんえく
原直に代て権治判官が妻
めりて人艶書とてくなり
まるとや徹書記が物音か
或人の云兼好は後深草院
乃水面の侍あり。帝崩
てのりぬ。聖徳太子りて。道

武彦守原直より海へんえく
原直に代て権治判官が妻
めりて人艶書とてくなり
まるとや徹書記が物音か
或人の云兼好は後深草院
乃水面の侍あり。帝崩
てのりぬ。聖徳太子りて。道

内はよりりてはよむと稱とねりたるは
かり後宇多院崩侍ありにりて
きりきりて發見の因縁之際
慶運淨辨兼好とよむの四天王にてありし
かりはよむと草ハ清々納言云草紙のや

ハ草紙とはよむと草と名づくありハ
端の禪とよむと號とよむと稱とよむ草
紙一林此はよむとよむとよむとよむと
ハかこり草草のよむとよむとよむとよむと
ありの草之**愚明**九七種草之中には例多共
三とよむ大草道とよむとよむとよむとよむと
大草のよむとよむとよむとよむとよむと
又老道道乃のよむとよむとよむとよむと
號而一都のよむとよむとよむとよむと
或ハ法花とよむとよむとよむとよむと
二字にてよむとよむとよむとよむと
よむとよむとよむとよむとよむと

ハ草紙**兼好**得道乃大意ハ儒教道の

三と兼備とよむとよむ草紙乃大體ハ清カ
納花草紙とよむとよむとよむとよむと
何と用分ハ老とよむとよむとよむと
と觀一各因とよむとよむとよむと
とよむとよむとよむとよむとよむと
朝乃道とよむとよむとよむとよむと
今いよむとよむとよむとよむと

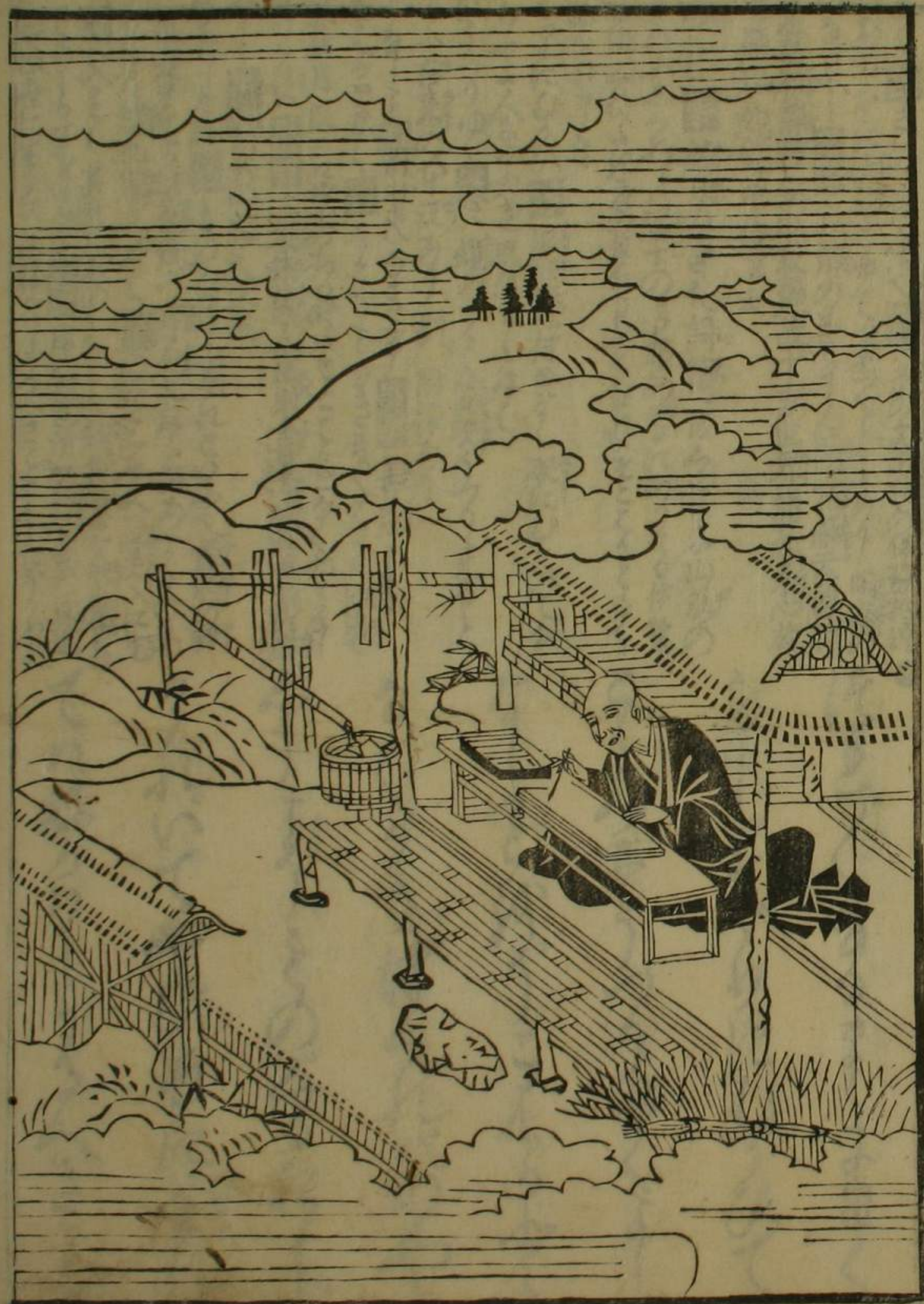
條**愚** 上百三十七段下百五段合二百四十二段
野 上百三十五段下百五段鉄二百廿

世とい時淨弁慶運頼阿
兼好乃四人と世中天王と
號とよむとありハ草紙とよむと
く草と名づくありハ
發端のよむとよむとよむと
ふあり草ハ草紙のよむと
會一又清虫とよむとよむと
草葉とよむとよむとよむと
ハ草紙乃とよむとよむと
紙源氏物語の禪とよむと

一初二

兼好ハ天台ノ教成るべく
又在老のよむとよむとよむと
んくあり世信とよむとよむと
中記とよむとよむとよむと
感ハ風景成るく男女乃
信といくたがよむとよむと
なるとあり室女和語の文章
あれたくありとよむとよむと
とのあり

愚明 條後乃とよむとよむと



ト部系圖

鈔

大織冠鎌足

意義磨

清磨

諸魚智治磨

日良磨豐宗好真

無延

無忠

無親

無政無俊無康

無貞

無茂

慈遍

大僧正

右京大夫

無名無頭

無雄

南朝詔
氏部大輔

無直

無好

藏介シカウ
左兵衛佐

後五上
以俗名爲法名

無藤

無益

無夏

無豊

無熙

無敦

無富

無名

無俱

無致

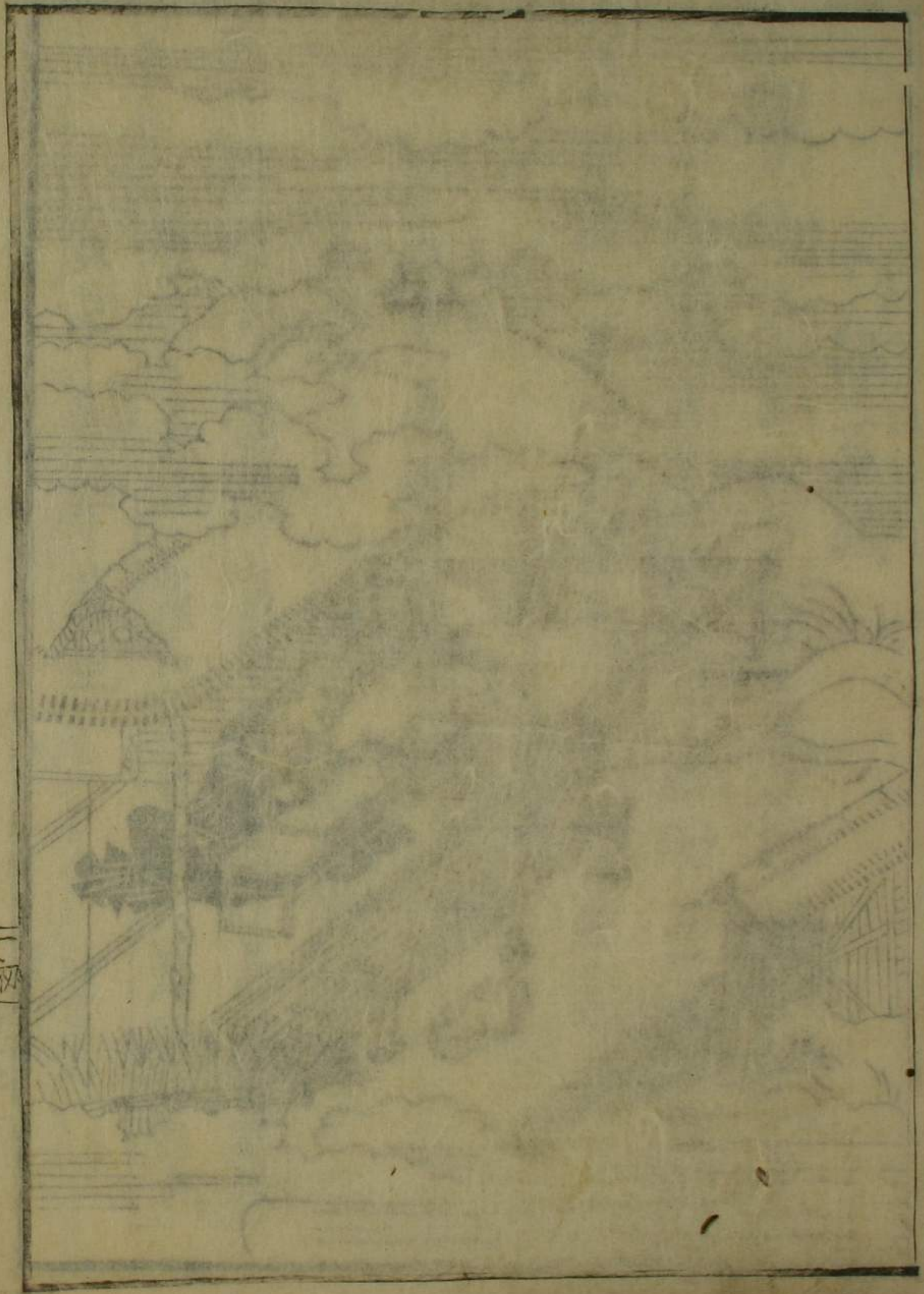
無満

無右

無見

兼治

兼里



一初

つまじく**鈔**さひひきく一条のまね撰の仔細抄

の字に宛たてまつまじく一の

内發**寂靜**輕安由寂靜故干が世助諸如來心於

中顯現如鏡中像云云

日くし**野**終時の香く詞花日くし山松の

きのかまらけい富どのの雪にありなる伊勢

物語にれはえの目くしきくしきくしきくしきく

すくまにむらひ**鈔**風雅集何となく破にむらひて

らやよんまのまき思ひあはれ

心にうつりゆく**鈔**鏡のまきかたきうつりまると

りふなまのまきあり別一附録あり

うりやと**野**別由來るまき**野**善惡とあり

うりやと**野**別由來るまき**野**善惡とあり

神無月風三た第のあつたこととくわくわく

くはつた**野**三教指歸人感則**野**動於中書於紙

あや**野**異の字くま危

おろおろ**鈔**のまきかたきうつりまると

也是まきうけ**鈔**の序分入序とありまき

はまきづくちるまきくま目く
らし。まきりにむらひて
らりみうつりゆく
なりと紙うこまらや
まきりまきけられあや
あうとうまのぐるお
くれいてあけをにまき
てのまきりうまきこと

劔いてや發浩の擧げは句一段の大綱と擧げ也
ねりりるき愚明三累金氣之類成願得其志
市門の市位劔これより正女成り入るなり

いともういへば愚明最も忝といふん天子の位と
るといふも尤恐しあること野可畏とて乃
樹徳も目な記さるる事なり

竹の園生れと急ぎすて野竹の園に親本と
あり皇孫の程くすてといふん愚明繼嗣令親
王の皇の兄才皇子皆為親王別附録あり

人石の程ありぬを野朗詠親王詩此花是非人
種再養平聖三片霞此花是非人間種瓊樹枝頭第三
花野壯子美家王孫詩高帝子孫及陸運龍種自
与常人殊

やんことささ劔かめりる野又上野をやんと
るはといふ原は桐壺にやんとさささふいありぬ
くとあり花名餘情やんとささといふきとありて

上野のふといふとあり無止とあり
の人劔擧政閑白をやんといふ天子の
劔執極必蒙一座之宣旨故稱人

さらりる劔今更のやんとさささ野殊更の美
た人劔擧家外は皆凡人也されを子孫と
んやんといふことあり野林家中少将をささ

可憐野毛詩野人あつた人擧家の外乃
人を擧別子附録あり

さうねかり先きさみごと

乃歩くくわいのとより

行乃そのおのよ

あつて人あつた

ぬぐやんとささこの人

れはありさ海いさうな

里た人もとさなり

さうたつたさささ

さなりると劔近湯の舎人陸方は湯方に
あり中府の湯方と小湯方と小湯方の湯方
には不及いれぬの湯方と中府の湯方
ゆりささといふことあり

ゆじとささ愚明いささといふことあり
えあはなれと野ありささといふことあり
古今のささといふことあり

あつてささ野やまきささといふことあり
ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ゆじとささ愚明いささといふことあり

えあはなれと野ありささといふことあり

あつてささ野やまきささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ささささといふことあり

ウミコトトシカノの所せきまて神
露けき
ありしあり野 おのひつさちさこひあくる
衣冠より鈔是より九条教の内辭

美辭と取るとるれ 愚明 もより魚好辞

九條殿 鈔 右丞ね仲補公之 愚明 人王六十代 醍醐

天皇の時の人 閑院 あり

順徳院 鈔 人王八十代 後白河院第三皇子之
秘抄とて一巻あり 林市 清書とて名付

おがやけのなり物 野 帝王へさくら物 余字を
おがやけをより 遊仙窟にの天事と書てお
がやけことよりあり

なる人をもうそそおあふ

凡ゆる衣冠より車に

まて有子あふひく用よ

美辭とととむるもあれ

とと九条教の 鈔 あり

侍る。順徳院の 秘抄の事

其か 勢強つるあ。おがやけ

乃なり物なるをりあり

をとりてよりとすとより

ゆんま

方にいとくとも。このま

さうく。野 あり 俊成のれり。させし人のあ

と書てさしとよりあつていとくま

玉のさうまのそとあつて 鈔 きたのあつて

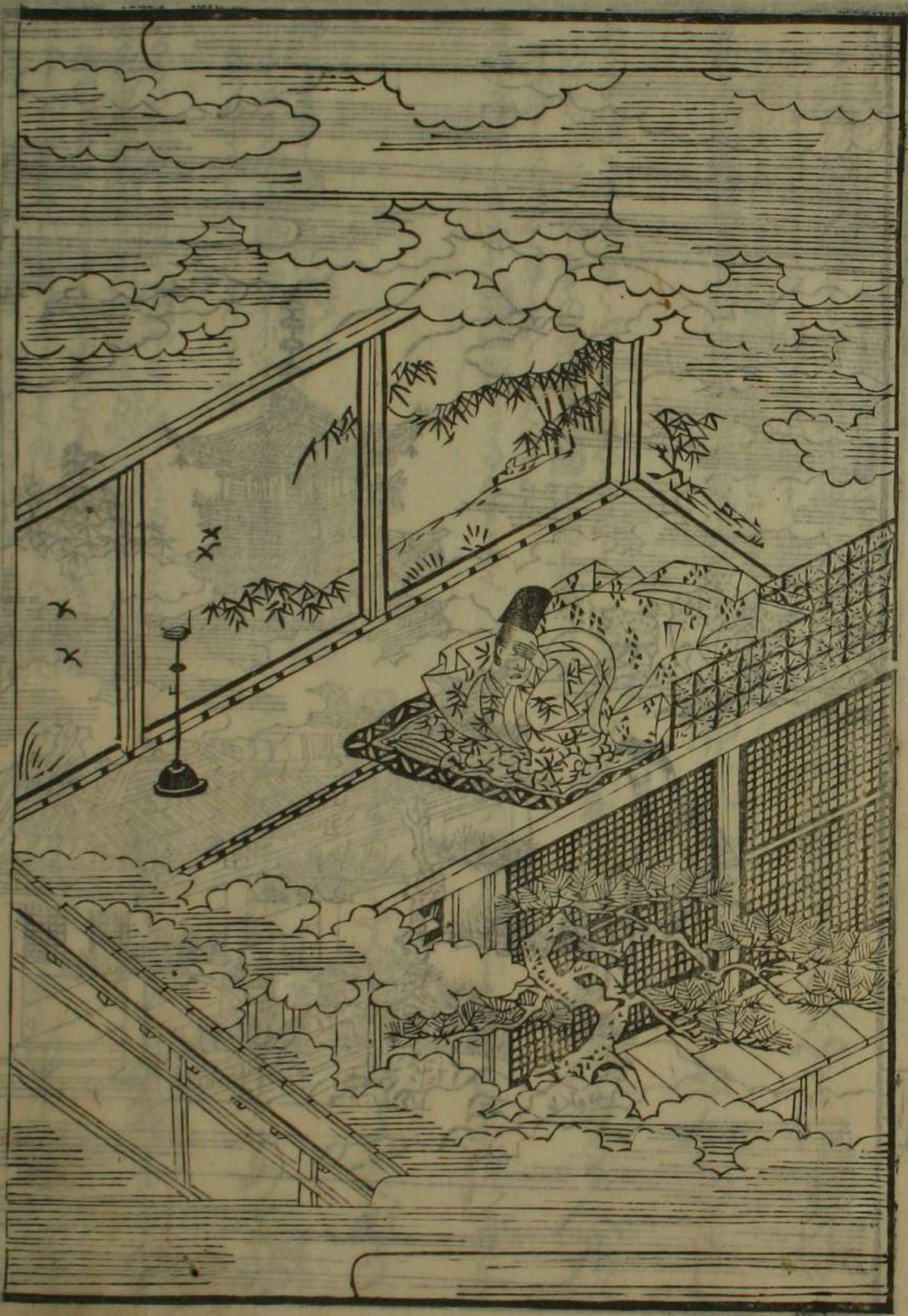
璣府 王施無留 桂華 無實 云列 附録あり

乃いさめをのそりまをけ

さうまをゆごひありき。親

あふあふがこれ 愚明 万葉よりああ我らへさ

そいさうまのそりまをけ



あつさきかたに思ひこられ野性な海老さめ
 こころの養ふもくくへへ八雲歩ゆとす
 るしくこもりとあり雨風くきまどあれい
 くりあつさきかたに思ひこられとす
 まいりくりくまれのあつさきかたに思ひこられとす
 さめ
 こころの養ふもくくへへ八雲歩ゆとす
 まいりくりくまれのあつさきかたに思ひこられとす
 すやまのぬいこも穴とくりくりひりり
 酒とひあがり
 おくたれ野やさうさうさうさうさうさう
 老いさうさうさうさうさうさうさう

ひまのいもゆなくあつさ
 るさうさうさうさうさうさう
 独孫ぐらにすさうさうさう
 ひまのいもゆなくあつさ
 るさうさうさうさうさうさう
 あつさうさうさうさうさう
 おもひれんことあつさう
 りんぐらにすさうさうさう

んぞれめきする野枕草紙三んとれめきするわらわ

之米の仙人元亨釈書十八卷米仙者和州上郡人
入深山学佛法食松葉服辟邪百騰空言過故里會
婦人必足踏洗衣其脛甚白忽生深心即時墮落漸
喫煙火後塵寰然和黨安秀堂書其名曰昔書其前仙某
今日券之中往々猶有半澤米然嘗於高市郡當精舍
鑄文六米師金像并二菩薩像所謂久米寺也後之倫
仙菴基今猶在和州之賁且昔婦女世言曰我不墮不用仙
頭不出山果然久米見白脛而墮有以釣我於戯色之
賢人也可不慎乎

此恩明旺の字

外の野の色の野外ららくのさうらう
うらうぬとゆるり

女の髪の野文選西京賦衛后與於鬢髮危燕置於軀
轉詩君子偕老篋鬢髮如雲不辭髣髴別爾渾田明は野野植に以上と二修ますと

人の程恩明人跡之
んん恩明心映夕栄と去時ハ栄の字を去る儘の目うづのあまひ分乃程と

けえの野河海氣の字を去る日中記形勢と身へむどののひらけりひ
新後樂記影氣と書り
おろ恩明物執とありわつたの事あり礼
記云凡音生人心若情動中故形於声声成文
謂之音是故治世之音安以樂其政和世亂世
音怨以怒其政乖也亡國音哀以思其民困也
うらわの海野水澄らりあるにうらわの海に
とわの海野水澄らりあるにうらわの海に

よて恩明凡二際總説之
うらわの海野のひらけりひはるけりひ
いとひのんせいさるさると云ハ新とい事
野拾遺三君とあつらうこのうらわの海に
けしうらわの海に
おとわとて思ひんん絶の字
たのくもあつらうの野堪悉とんんあ
ぬまのりく堪悉するに只色を思つゆらり

白ひよの必んとれめきする

物なり久米の仙人の指あ

らよ女のとれめの白とさそ

通をうしひひんの海とよ

手置とてふかどのひらけり

肥あがうづきうらわの海に

らあうぬとゆるり

女の髪のためでたがんとく人

うのやち野伴菴 寄寓

うのやち野のり野背山の山人の家に
たててやちの思入る者の老月とすこたり
我もすこたりけちとすけけをみるべし

いまめりくきらくかきくねと野
いそくろふいあねどもとさき
ものあり愚明物古とせし
日さこちりぬ野とりけくろりぬそのまふけけの備測
明り野庭柯以候類とのひ又木依々以向榮とのひ
周茂存り窓前茶をいりりして自家の意思
と一般なりとの思ひやとせし
すのと野 實子とせし

Commentary in smaller characters, including the name '野伴菴'.

まじりかりのやちりといひ

と真五物あまよふ人の乃

とやちの候ありさるあひさう

入る月のあまよふさう

と見あさうかひのさきりく

さうりかきくねとせし

物ありけとあまの

茶もふあまよふさう

すいりつすいりつとせし

洞夜野をりかひのやちりぬをいりぬとせし
たて二洞のまじりぬの思入る者の老月とすこたり
の右存りて中野要野をいりぬとせし
一人二人若手人といひてをいりぬとせし

たけくれたこの心とつり野を花葉に化
ちをいり
うのやちとせし野とせし

えあしぬ愚明縁ありぬ之形ふふ付八とつり字と
はとすこち例あり又えふとさうと略して
えとさうりあめさう八風雅集はの小ら
まておき八山脈のさうりも深きえとせし
お裁の茶本すす人のあまよふさう野枝とせし
茶本すりてさうとせしけちとせし
とさうねとせしとせし

まのたよりたうくさう

あつ洞夜も昔あひさう

さうりあまよふさう

たもまおほくのたたくこのふ

とせしとせし

乃やちとせし

洞夜ともあまよふさう

の茶本すす人のあまよふさう

そてもやいさくすひき又時のまのたつめ
もろりる人野自樂天履道詩真彌地
亭山眞觀家食詩激多朱門鎖空宅主人
到了終啼又吳軻發宅詩不袖凄涼眼前事感傷
一火便成原すこころありといつれあまうと
いふまゝ

大うこのあまのまうことさぬいなりこころれ
まうをむしひてトをむすれとこころり
家と他つ詩詩の詩必賜と云文よんへり種尚
神う慈母の道生八感のせり其人多たすへ
き家居て其上に好むあり春秋極楽の
檻に井のりたるはとをいすめ海語に藏
文中う居寮をそりて空辨う居室をうと
かめこり

はくちあせらるるらんあもる
くといまびりさぞもやい

かぐへむむべき又時のまら
りあうともぬらんさぞうら
るるのあむる大うこの家

長よこころさぬいなり

ほほ李の野実定公之野野曰ほほ大寺にありの同
いどころあり履道の角の角の間とこころり
ほほ大寺を野のあまに對面せられり

愚明をより野推にい別はよけり

寝敷よ野のあまの
一を

西の野東鑑六云尤若と秀憲法所号西岸保
延三年八月進世云云即秀和九代嫡孫陸奥守秀
衡入道者上人族之國俗名尤若兵水則清も野院
の北面之放道の推貴之

あやのふたのまのがります小坂敷
をそりれりあまの
んて野のあまの
あまのまの
らざらるるとまの
小坂敷のあります小坂敷
乃むいよつごやあまの
まうりかえりのためし

あまのふたのまのがります小坂敷

まうりかえりのためし

及るやどにかるはなす大

棋子の本を枝もたり

くかひひりしことぬこと

さかしてげ本わううまか

いそぎしり。

同いんんとあやうに

語らうたよもその

枝もたりに野枝のたひむよ古今にありて足て

杜子美呈吳郎詩堂前撲棊任西鄰無食無兒下

婦人不為困窮寧有此祇緣恐懼轉須親即防遠

客雖多事使捕跡離却甚真已訖微末食

思戎馬淡盈巾と云吳郎と云者未て子美の漢書の

家子居多りて堂前撲棊の事あり西鄰の寡婦等

と云てちやうの貧うゆよかくと云く彼おさうき

程にちやうみて念化とて一よりて割棊すか

すゆはた他の冠盜のちをされあはれと云ゆ

下棊をうつと擲するふいあはれは婦の貧困を

及て世間の世乱と云ひゆかむむと云子美の

けんを擲て仁政ある一女王の園へ芻蕘

者難免者のゆもけんをへ子美の棊と云

まゝるの兼好の栗栖野の山野の棊子と云

ころをきくつんは通せり

うさく野表裡もくこん野をのこるはさうあまのりもくうさくひ

あぐさ海人こそうまうるる

にさる人あまのぐれれあ

たがいさんとむひひあたら

独あるんちやせんたうひり

いんし移のこをばは実とま

かひをわういさうりたうあ

もあらん人さう我いんちあ

うさく野表裡もくこん野をのこるはさうあまのりもくうさくひ

あぐさ海人こそうまうるる

にさる人あまのぐれれあ

たがいさんとむひひあたら

独あるんちやせんたうひり

いんし移のこをばは実とま

かひをわういさうりたうあ

もあらん人さう我いんちあ

たりひにいつかろのよと助我友

野少もたりいさうと野終日不

我いんちあ思明我いんちあ



時秋積雨霽 新涼入郊墟 燈火稍可親 簡牘可要 詩曰
 少とひらけて 野雄也展也

尺の世の人と友とする 唐書狄仁傑為見時門人 乃けて尺の世の人と友とする
 有被害者吏詰衆爭辨對仁傑誦書不置吏責之
 仁傑曰黃卷中方与聖賢對何暇偈俗吏語耶

司馬溫公 獨樂園記 迂叟平日讀書 上師聖人 必曰 此よるうあぐさや
 下友 群賢 思明山 金博 檢群書 尚友 古人 新古今
 このよるうあぐさや 此のよるうあぐさや 此のよるうあぐさや

文選 魏の武帝の子 昭明太子の撰むるあり
 六十卷あり 別附録あり
 ありれるる 鈔ありれるる

白氏文集 白居易の文集 十帙 七十卷 白氏長慶 老子のこととん 南華の篇
 集い 五帙 都五十卷 長慶集 前也 後白氏文集
 と成て 十帙 七十卷 まする 積微之序 別附録あり

老子 姓の李 名の耳 字の伯陽 又老聃とも名付 このらあ乃らんやとものか
 楚國の人 老子 姓上下あり 道德經とも云 附録あり
 南華の篇 南華 楚の荘子のもの 南華 真經とも云 附録あり

名付 老子のこととん 篇に對して まする 別附録あり
 けりる 物も 古のいあへん 終

けりる 物も 古のいあへん 終

けりる 物も 古のいあへん 終

源氏物語のいふものよりいへば **罪** 源氏鑑解の我らるるに
をいかにぬききんと推す 終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
ころありけりめとむりう空ゆらもころの人のい
ありりやまきつゆいへへゆりもはるまきつゆ
物といふにと君よりいせりうこれ別をな
いんかうきすすらよひきうきんをきとけり
ところ人のいせりうたがりありころを思ひ出
源氏は物語のいふに **罪** 終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
ふと物といふにと君よりいせりうこれ別をな

新古今のいふは **罪** 終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
山もあはれよ木の葉よりいせりうこれ別をな

終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次

一れ

罪 終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
あを後て評判とせりよき

かん **罪** 終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
あを後て評判とせりよき

いさや **罪** 終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次
あを後て評判とせりよき

むら此人乃よあるいふは **罪** 終るるもいせのこもなり 詞この類のとりけり。げ次

すかみりて 國直の海見

物よあはれ。さかしくともさか

あてすのこゝろまほしきげよ。

ありれもさかしくとも。梁華秘抄

抄の郢曲のこゝろさかしくともあ

りれあることのおほのめさき音

乃人いひよひよとてゐること

さかしくとも。みかひぐくさゆるあ。

大倍正慈國のちれ山里にといふ人のことさかしくともいづくもあまきさかしくとも。さかしくとも。

梁華秘抄 後ち有院のちれ化 抄の御馬樂の巻

とさかしくともあまきさかしくとも。後ち有院のちれ化 抄の御馬樂の巻

通典百十五云漢有虞公善歌能令梁上塵紀

博物志曰秦鼓無節悲歌聲震林木晉書曰行雲

謂其友曰吾聞城東之聲遊糧道雍門 齊歌曰

而去餘響遊梁三百不絕云云故雍門人至本善歌哭

效娥之遺聲也このまにさかしくともいひよを梁華

野曲 元稹梅詩 郢曲 琴 空 後 漸 奎 律 隨 載 下 里

文選宋玉對楚王問客有歌於郢中者其始曰下里

巴人國中屬而和者數千人其為陽阿薳露國中

屬而和者數百人其為陽春白雪國中屬而和者數

十人引商刻羽雜以流徵國中屬而和者不過數十人而已

是其曲弥高而和弥寡 郢人楚國のみさかしくともいひよを梁華

ことさかしくともいひよを梁華

大倍正慈國のちれ山里にといふ人のことさかしくともいづくもあまきさかしくとも。さかしくとも。





いつくあも **思明** をより野推は別派ふよけり くることめまむらふらまれ

いさり **思明** あうろあふいふ音の内喉音の相違
 意心あふん人よはるまはの意なるあふんよらあ
 意のなりををさうらむあうりの意

いさりいさ **思明** もかまといさりめまうらま
 さ。おあうひうらふ **山** やま 里 り どの

められぬ **思明** 又さられぬまめみま音の内唇音相違
 のとめられぬまめみま音の内唇音相違

思明 都 みやこ ところ集成云天子所官曰都又京
 ところ みやこ 廣雅云四起曰京又京師天子之居公羊傳
 京者大也師者衆也天子之居必以衆大之言也
 安の都八山城國平安城あり

あふたよりもとめて文やる
 そらふりのみ ひんぎ 後 うま 置 ま まるる
 あとひの海をとりけ
 さうらのあふて かた ても方よしん

「人」のふりかへりあり 野 孟子 為富不仁 矣
為仁不富 矣 別附 蘇 許由 孫 景 三人
と 奉て 刺す 顔 回 子 魯 終 の 賢 人 多く
い や さ 難 不可 後 也
許由 堯 天下 と ゆつ と の 後 ひ きれ も う け だ ま れ る ち ろ う よ 許 由 と
して さら 莊 子 子 然 り 高 士 傳 許 由 隱 箕
山 以 筆 蘸 水 飲 之 人 遣 瓢 得 以 取 飲 と 此 掛 於 樹
上 風 吹 塵 と 作 声 尚 以 為 煩 遂 去 之 矣

くさくさ 昔より 賢人の 賢い
いひつる人の 賢い 方おもふ
あつと 思ふ かくて 飲らるるを
あつと 思ふ かくて 飲らるるを
あつと 思ふ かくて 飲らるるを
あつと 思ふ かくて 飲らるるを

「人」のふりかへりあり 野 孟子 為富不仁 矣
為仁不富 矣 別附 蘇 許由 孫 景 三人
と 奉て 刺す 顔 回 子 魯 終 の 賢 人 多く
い や さ 難 不可 後 也
許由 堯 天下 と ゆつ と の 後 ひ きれ も う け だ ま れ る ち ろ う よ 許 由 と
して さら 莊 子 子 然 り 高 士 傳 許 由 隱 箕
山 以 筆 蘸 水 飲 之 人 遣 瓢 得 以 取 飲 と 此 掛 於 樹
上 風 吹 塵 と 作 声 尚 以 為 煩 遂 去 之 矣

「人」のふりかへりあり 野 孟子 為富不仁 矣
為仁不富 矣 別附 蘇 許由 孫 景 三人
と 奉て 刺す 顔 回 子 魯 終 の 賢 人 多く
い や さ 難 不可 後 也
許由 堯 天下 と ゆつ と の 後 ひ きれ も う け だ ま れ る ち ろ う よ 許 由 と
して さら 莊 子 子 然 り 高 士 傳 許 由 隱 箕
山 以 筆 蘸 水 飲 之 人 遣 瓢 得 以 取 飲 と 此 掛 於 樹
上 風 吹 塵 と 作 声 尚 以 為 煩 遂 去 之 矣

「人」のふりかへりあり 野 孟子 為富不仁 矣
為仁不富 矣 別附 蘇 許由 孫 景 三人
と 奉て 刺す 顔 回 子 魯 終 の 賢 人 多く
い や さ 難 不可 後 也
許由 堯 天下 と ゆつ と の 後 ひ きれ も う け だ ま れ る ち ろ う よ 許 由 と
して さら 莊 子 子 然 り 高 士 傳 許 由 隱 箕
山 以 筆 蘸 水 飲 之 人 遣 瓢 得 以 取 飲 と 此 掛 於 樹
上 風 吹 塵 と 作 声 尚 以 為 煩 遂 去 之 矣

「人」のふりかへりあり 野 孟子 為富不仁 矣
為仁不富 矣 別附 蘇 許由 孫 景 三人
と 奉て 刺す 顔 回 子 魯 終 の 賢 人 多く
い や さ 難 不可 後 也
許由 堯 天下 と ゆつ と の 後 ひ きれ も う け だ ま れ る ち ろ う よ 許 由 と
して さら 莊 子 子 然 り 高 士 傳 許 由 隱 箕
山 以 筆 蘸 水 飲 之 人 遣 瓢 得 以 取 飲 と 此 掛 於 樹
上 風 吹 塵 と 作 声 尚 以 為 煩 遂 去 之 矣

わて世の情も人けえ。

これの人の情も情も人けえ。 鉄 日本の人

かくるの情も情も人けえ。 別附録あり

おのの情も情も人けえ。 保氏抄

おのの情も情も人けえ。 保氏抄

おのの情も情も人けえ。 保氏抄

おのの情も情も人けえ。 保氏抄

おのの情も情も人けえ。 保氏抄

おのの情も情も人けえ。 保氏抄

ちのの情も情も人けえ。 保氏抄

ちのの情も情も人けえ。 保氏抄

ちのの情も情も人けえ。 保氏抄

ちのの情も情も人けえ。 保氏抄

ちのの情も情も人けえ。 保氏抄

たぐんをのこそあやまら 野王判公の春色松入眠
不祥このつあひくうか
そりてあらえらるの心よそあま野名にたきた
る古今にみ月すつ花くらゝの香とうけえ
むうれんの袖のうそす 愚明かたきをた
ちるの香をとめてさくや昔の人やこのき
るひ梅のあひの 花梅のむりよき
るれたるを梅の白ひは昔もこのき
梅のむあふぬをさもむりよき
まの月の ともりむかうあれとおむか
たう袖あまうやとの梅も 梅の香に昔を
とふまの月こそあまねう袖よりつせの

やまあきのまよけは夜のおゆつるまよ
二尺の梅うんを付て有くとまり殊傍の初
愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明 愚明
ぬらちやあて
灌佛のころ 野をとり夏のみをええ 灌佛の四月八日
よおとるりつは 佛生念の推古天皇よりつるまよ
釈尊俱毘羅殿に生れさす 天龍下り
ふささくさああをさすりつるまよ
公事根原はかたより 別附録あり
あまら野 公事根原のあまら野をのこそあまの 國の四月中
の申の月おとるりつをあまのあまら野へ

たぐんをのこそあやまら 野王判公の春色松入眠
不祥このつあひくうか
そりてあらえらるの心よそあま野名にたきた
る古今にみ月すつ花くらゝの香とうけえ
むうれんの袖のうそす 愚明かたきをた
ちるの香をとめてさくや昔の人やこのき
るひ梅のあひの 花梅のむりよき
るれたるを梅の白ひは昔もこのき
梅のむあふぬをさもむりよき
まの月の ともりむかうあれとおむか
たう袖あまうやとの梅も 梅の香に昔を
とふまの月こそあまねう袖よりつせの

たぐんをのこそあやまら 野王判公の春色松入眠
不祥このつあひくうか
そりてあらえらるの心よそあま野名にたきた
る古今にみ月すつ花くらゝの香とうけえ
むうれんの袖のうそす 愚明かたきをた
ちるの香をとめてさくや昔の人やこのき
るひ梅のあひの 花梅のむりよき
るれたるを梅の白ひは昔もこのき
梅のむあふぬをさもむりよき
まの月の ともりむかうあれとおむか
たう袖あまうやとの梅も 梅の香に昔を
とふまの月こそあまねう袖よりつせの

たぐんをのこそあやまら 野王判公の春色松入眠
不祥このつあひくうか
そりてあらえらるの心よそあま野名にたきた
る古今にみ月すつ花くらゝの香とうけえ
むうれんの袖のうそす 愚明かたきをた
ちるの香をとめてさくや昔の人やこのき
るひ梅のあひの 花梅のむりよき
るれたるを梅の白ひは昔もこのき
梅のむあふぬをさもむりよき
まの月の ともりむかうあれとおむか
たう袖あまうやとの梅も 梅の香に昔を
とふまの月こそあまねう袖よりつせの

一四五

たぐんをのこそあやまら 野王判公の春色松入眠
不祥このつあひくうか
そりてあらえらるの心よそあま野名にたきた
る古今にみ月すつ花くらゝの香とうけえ
むうれんの袖のうそす 愚明かたきをた
ちるの香をとめてさくや昔の人やこのき
るひ梅のあひの 花梅のむりよき
るれたるを梅の白ひは昔もこのき
梅のむあふぬをさもむりよき
まの月の ともりむかうあれとおむか
たう袖あまうやとの梅も 梅の香に昔を
とふまの月こそあまねう袖よりつせの

たぐんをのこそあやまら 野王判公の春色松入眠
不祥このつあひくうか
そりてあらえらるの心よそあま野名にたきた
る古今にみ月すつ花くらゝの香とうけえ
むうれんの袖のうそす 愚明かたきをた
ちるの香をとめてさくや昔の人やこのき
るひ梅のあひの 花梅のむりよき
るれたるを梅の白ひは昔もこのき
梅のむあふぬをさもむりよき
まの月の ともりむかうあれとおむか
たう袖あまうやとの梅も 梅の香に昔を
とふまの月こそあまねう袖よりつせの

御倭 公事振領云十二月晦日に倭の今日日あるや
り表されい八舎人察鬼を以ての陰陽察察徒
とてく南殿のちよつとてし上卿の下乞を
おふ殿上人も所敷の方に立て櫓のち葦のちと
り仙花門より入て赤をへて櫓のたよ出つ今
赤赤赤に燈を多くとてと赤を輝耀盤
盤所のみさうに燈盤をひさくくそ
とて追儼とて五年中の癘射とてふふは
鬼といひ方相氏のことと四目をそおろけ
るる醜さき手は櫓とて又依ててサ人
紐の布初射る者と平して櫓裏の四門をま
つる各天皇慶雲二年十月に始るは年天下に
百姓おく瘴疫は罹れりな一列所あり
方相 云本根云元元の實の時天皇屬野を
とて天地に方の山陽を拜し給て櫓射とら
い室社と祈りてとてとてはくはついつ
とてつとてと仁和五年正月寅刻に天地盤
方屬野と拜し給て宇勢帝の所也とて
とて盤射といふことと又皇極天皇御と祈りてとて
殿外の上よ必幸ありてと方とてとてとてあり
雨又りてはるるり日か記は載りてはる
とてとてとてとて其上属屋と拜してはる
除く越天地瑞祥志といふ書にも記しとて

二の

皇をたにまふ**罪**いとりくありくを倭
あつひの表あどをとりてこれありき
此ひぬ

るれ人のちをそとてまふる**罪**おと好思
玉はつる年のおりにあはりてとてとてとて
ありんとすんはち格さあはるはとてとて
ま**大膽**目まふるつる兼好の付代よとて
あどまふる今れたはるはとてとてとて
珍いといふとてとて**思明**報恩經年上六度
聖靈未とあり

のゆくそのけき**罪**年の海りまてといひ
つうてたまにまふるつるをあくにといひ
の終端はあつひのうつりつるをまふる
とておまひりといふ文字にまふる男とて

わをそとてはまるとつ晚方
ふらさするよあさくあり
ぬらとて年のあはるしんが
そくれがれ人乃る和と
てまふるつるまふるこの比都
よいさきとあづるのうとに
わはらるるまといとてあり
とてありれりしりがくてぬ

凡のこより人よんつくめ思明集韻云凡
天地之使也又陸佃云萬物以風動以風化云古今
秋三ぬと目あらさるるやとねとの凡のまにそ
とらるれぬ

月花のさうも世風のこころ
人よんはくも世のまにひ

沅湘日夜三休詩戴叔倫註盧橘花開楓葉表
出門何処望京師沅湘日夜東流去不為愁人住以
時註云身不得去故愁水之去所以深傷已之不
去也蓋叔倫事曹王於湘湘有是作秦少游韻補
別有詞云湘江幸遠湘山為誰流下瀟湘去必用
此意沅水湘水皆水名思明葉平の多が水と
すめよりひくちるなといふまゝとてふとまゝと

とらるる流るる水のりり
とらるるつらとあてたくれ
沅湘日夜東流去愁人のた

嵇康も山沢にあつひ野文選卷四十三嵇康與
山濤絕交書其云遊山沢觀魚鳥心甚樂之一行作
更此事便感病能持其所樂而從其所懼哉嵇康字叔夜竹林の七賢の其一晋書傳あり

とらるる病を刃作しとあ
りれりし。嵇康も山沢は
一木

人さくあぢまきつた劔云賓傍那の多とらあ
水さきまきつたとまけあおのうらひあま
さぬふありと思明古文漁父辭行吟澤畔

あつひて魚を刃作しとあ
あむむとつら人さく水さ
さぬふありと海のひありま
つらつらふらつらむらあし
何事もあつら世のこころ
はりま今やうのまにひ
くさくあぢまきつたのま
あつたそのけくあつら

本のたのたつ野大王番姫の舞と周礼の考工記
とらるるのこころみとありつら木石金玉とま
むらあり

古代のすくすく野考古風傳古風をかく古書あり

いつれもいみじの野考るくの當道野の形をこと

うつらうめてありぬの世にエるふはにあくは

後語は能く不能くあるも今の室のいみじへの

制法よありさることを云へ

文の何野文章或は御製清野と云へ

及古野及故ともある物をくさるさうさうさう

き紙といふもの多くあつてあつてあつてあつて

之禪録はるるるるるるるるるるるるるるるる

士必清食以交故写書教千巻

たりの何野平生の書後

いさゝかおも。古代の野考

おろとろあま。文の何野

昔の及古ともいふるるるる

いふも。古野考るるるる

もてゆくもいふるるるる車

いふも。古野考るるるる

いふも。古野考るるるる

主役寮人教へて野を教つるさるの儀野の時

次とていふもの多つてあつてあつてあつて

名目鈔云女官也

尚殿一人 掌供奉 興 御製 清野 焚香 薪炭之長

典殿三人 掌 尚殿

女儒六人 近代不着衣只小袖唐衣也 乃在道安御

摘除指油等代也

世勝講野 一条院長保四年五月七日指油代とて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

勝王經と清むる野考の興野を野考るるる

勝王經と清むる野考の興野を野考るるる

海師徳也とありさるるるるるるるるるるる

海師徳也とありさるるるるるるるるるるる

海師徳也とありさるるるるるるるるるるる

海師徳也とありさるるるるるるるるるるる

海師徳也とありさるるるるるるるるるるる

海師徳也とありさるるるるるるるるるるる

海師徳也とありさるるるるるるるるるるる

いさゝかおも。古代の野考

おろとろあま。文の何野

昔の及古ともいふるるるる

いふも。古野考るるるる

もてゆくもいふるるるる車

いふも。古野考るるるる

いふも。古野考るるるる

人教とていふるるるるるる

いさゝかおも。古代の野考

おろとろあま。文の何野

昔の及古ともいふるるるる

いふも。古野考るるるる

もてゆくもいふるるるる車

いふも。古野考るるるる

九重野の内とて二条より九条まであり長根

歌あり九重城野といふ

神さひ愚明 久閑ひささありさる

いさゝかおも。古代の野考

おろとろあま。文の何野

昔の及古ともいふるるるる

いふも。古野考るるるる

もてゆくもいふるるるる車

いふも。古野考るるるる

いふも。古野考るるるる

人教とていふるるるるるる

いさゝかおも。古代の野考

おろとろあま。文の何野

昔の及古ともいふるるるる

いふも。古野考るるるる

もてゆくもいふるるるる車

いふも。古野考るるるる

徳大寺のき政大原の御

せしむる。

神皇の野々より

ありさゆえやうくむも

しるきことのみさるりせり

えり。神佛をいそぎ

こほ紙をくさるるもたう

て神の社を控う

神皇の野々より

一本に神皇の御事あり

神託豊鍬入姫命

於豊郡姫命

大神之

美濃到伊勢國

也。伊勢國則常世之

齊宮于五十鈴川

天降之處也

豊郡倭姫五百野

代々の帝の御事

太神

親王の御事

其の御事

院へ入

又

又

又

又

又

又

又

又

又

又

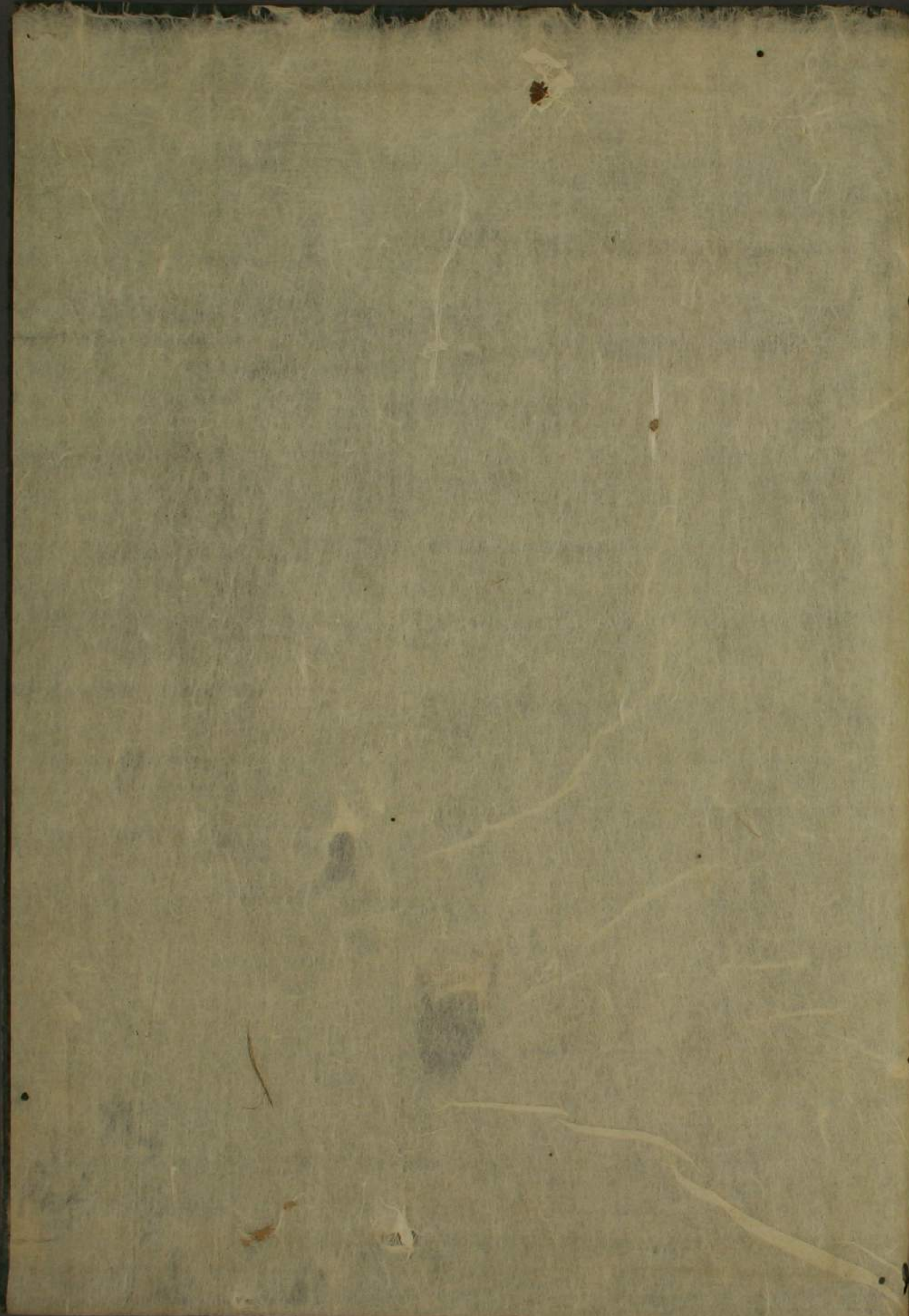
又

又

又

又

又



Handwritten text in a vertical column, likely in a cursive script, possibly Japanese or Chinese. The text is faint and difficult to read. A small rectangular label is affixed to the top left corner of the page, containing a red circle with a white character inside, possibly '0' or '10'. The page is framed by a thin black border.

1. 1. 1.

